

琉球大学学術リポジトリ

子どもが作りだした学びの場 ― 「子どもの文化的実践」の考察を通して―

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部附属教育実践研究指導センター 公開日: 2008-11-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉田, 直人, Yoshida, Naohito メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/8247

子どもが作りだした学びの場 — 「子どもの文化的実践」の考察を通して —

吉田直人*

The Student-Made Learning Environment — Through Observation of Students' Activities —

Naohito YOSHIDA

「収穫祭」という実践で、生徒が笑顔に満ち、自分の意志で考え行動していく姿に出会い、これが「文化的実践」に近いものではないかと実感した。そこで本研究では、「文化」というキーワードをもとに、この実践を考察することを通して、単元の再構成による学習の文脈づくりから文化的実践に高める端緒を見いだすことを目的とした。そして、考察を通して、「収穫祭」が文化的実践として生徒が学びの場を作りだしたのは、生徒の営みが自分の存在から派生しているか、その営みが社会に開かれ社会の吟味にさらされているかが重要な点であると考えた。また、文化的実践として生徒が学びの場を作るための、教師の支援の糸口についても考察した。

I はじめに

教育実践家の役割の一つは、これまでの学習に対する考え方をもとに、方法論を自分なりに発展させながら実践を行い、その結果を考察して次の実践への視点を提供することにあると考えている。その意味は、細かいマニュアルを作り出すことにあるのではなく、教師の授業構想にキーワードを提供し、教師集団の中での学び合いを支援することにあると考えている。

本研究は、討論をキーワードにして単元の再構成による学習の文脈作りを行ってきた。そして、生徒がその置かれた状況の中で自分の意志で自分の学びの場を築くことを期待してきた。もちろんこれまでの知識の注入より、自分の中

での知識の再構成による生きた知識になっているが、それはまだ与えられた学習の場であり、教師の期待像に答えるための生徒の活動になっていことが多かった。

しかし、「収穫祭」ではこれまでの実践と大きく違った生徒の反応にであった。この「収穫祭」では、オリエンテーションから話し合いの段階までは、今までの生徒の反応と変わらなかったが、いざ実際の収穫祭の準備・収穫祭本番では、生徒が笑顔に満ち自分の意志で考え行動していく姿に出会った。これは、自分の意志で自分の学びの場を作り上げ、いわゆる「文化的実践」に近いものではないかと実感した。

ところで、佐伯は、「『文化』というのは、つねに過去の伝承とともに未来への新たな文化

*琉球大学教育学部附属中学校

づくりのさまざまな実践が行われているという、未知なる世界に開かれたいとなみをさしている。こう考えると『文化』の概念には、ものごとの意味の根源に立ち返り、ものごとを再吟味し味わいなおし、『新たな文化の作り手』として世界と関わるという実践（それが文化的実践である）がいとなまれることが前提になっている。」という。

そこで、文化というキーワードをもとに、本研究のこれまでの実践の考察を通して、これまでの学習の文脈による主体的な学習を支援する状況づくりから、子どもの文化的実践に高める端緒を見いだすことができるのではないかと考え、実践を紹介し、考察を以下に行った。

II 実践

1 単元名「収穫祭」

<公民的分野>「生活と経済—企業と生産—」の単元の再構成による学習

2 仮説

学習者に組織におけるそれぞれの立場を与えることにより、その状況の中に放り込まれた生徒は、新しい価値の発見、吟味、創造の協同的な「しごと」をやる—すなわち実践する—。その実践の中で、共同体感覚を身につけ、結果的に社会についての生きた理解を深めるであろう。

3 単元の内容

公民の授業で、とかく経済は自分たちと疎遠で深まりがなく、実社会への希望的な橋渡しとなっていないのが現状である。そこでこの単元

では企業と生産に関する知識だけでなくそれ以上に企業活動に対する認識を育てたいと考えている。学校では、受け身での授業や生活が多く、指示待ちの傾向がある。しかし会社では立場が先に与えられ、その状況を自覚しプランを描いた者が成功していく。

また、経済での演習では、これまで机上演習が多く、生徒にとって価値付けが希薄であることが多い。もちろん机上演習でも、生徒にとって価値付けがきちんとなされていれば有効である。しかし、演習を実践に結び付けることにより、大きな可能性が開けてくる。そこで、学校や学年の行事というせっかくの実践の機会を、教科で取り込んでしまうのである。

そこで個別の具体的事象として収穫祭という学年行事を取り扱う。本校では、学級園でさつまいもを栽培して学年単位で収穫祭をおこなっている。これを千原村収穫祭として、学級を単位として芋を加工した出店企業を募集する。そこで、各自が株主として、学級単位で会社を設立し、生徒に会社でのそれぞれの立場を与える。そして各会社で、学級園のさつまいもを収穫し、さつまいもを加工し付加価値をつけ生産を行い、収穫への感謝としてのお祭り（収穫祭）でイベントを含め営業・販売活動をする。

4 単元の目標

<文化的実践の目標>

会社を設立して、試行錯誤を行っていく中で、新しい価値の発見・吟味・創造の協同的な「しごと」を行い、結果として企業活動についての認識を深める。

5 単元の活動計画（7時間配当）

1 時	千原村収穫祭説明会	出店の条件 (1)村内企業であること（村内企業設立促進のため）→学級で会社設立 (2)芋の加工品の販売をすること（千原村の特産品の販路拡大のため） (3)営業活動として個別にイベントを設けること（収穫祭にお客を多く集めるため）
	会社経営セミナー	会社経営に関する基礎知識の講習
	2	会社設立の前提

時	会社人事	えで地域に還元する。なお芋は各学級園の収穫量の全部を消化すること (1) 取締役（正副社長・部長）の選任（立候補・推薦） (2) その他の社員の配属（希望）
	顧問 教師	
課外	取締役会	(1) 社名の決定 (2) 会社の目的（利潤・社会的貢献） (3) 各部での役割の確認
3時	課会議(1) 商品について 何をすべきか 何を調べるべきか 調査・企画	* 課会議の話し合いで事業計画を推進し、社長・部担当専務ら 取締役で各課間の調整・最終決定を行う。 各部の意見→取締役会で決定
課外	取締役会	(1) 部会の進行状況 (2) 各部間の調整について（商品・利潤・貢献） (3) 非常勤取締役の視察について
4時	課会議(2) 話し合い 活動計画の決定	特に各部間の調整を中心に→必要に応じ取締役会
5時	株主総会	事業計画の議決 (商品・原価・利潤・販売価格について)
課外	芋の収穫（放課後） 商品の一次加工	
6	事業（準備）	会場設営・商品の生産・イベント準備
課外	収穫祭	ふれあい広場（放課後・授業参観日）
7	解散総会	配当・評価

6 具体的な各部・課の様子

会社の目的 (1) 芋の特産品の加工販売をおこない、収穫祭の成功に貢献する。
(2) 収穫祭を通して特産品の販路を拡大する。

会社の組織 (1) クラス全員が収穫祭の成功のために設立した、全員株主の会社である。
* 資本は教師が貸し付けを行うが、収穫祭での売り上げが赤字の場合は生徒から徴収して補う。
(2) 教師は顧問として、取締役にアドバイスをする。
(3) 部長までを担当専務として、取締役として選任。
* 役員は生徒の話し合いにより選任

立場	企画部		営業部		製造部		総務部	
	イベントの企画運営 と宣伝活動		商品の販売活動		商品開発と製造		総務経理全般	
	宣伝課	企画課	販売課	営業課	製造1	製造2	経理課	総務課
	宣伝活動 全般	イベント 企画運営	店頭での 販売活動	商品の セールス	商品開発と製造		経理全般	総務全般
何を する	ポスター テレビC Mを製作 する	ゲームを 企画運営 する	店舗設営 をし販売 をする	営業先を 検討して 販売をする	スイート ポテトを 製造する (例)	さつまチッ プスを製 造する (例)	売り上げ と経費の 管理をする	株主総会 の運営と 全体計画 書の作成
生徒 の様 子	ポスター作り・CM 放送、CMが少し大 変だったけれど、C M見て1組に来たよ と言ってくれる人も いて、やってよかつ た。		他の部長との話し合 いなどで、商品の値 段の決定を行った。 また前売り券を作っ たり、当日の会場設 営などでがんばった。		商品を作るのが目的 なので、いろいろな 案がでてよかった。 普段あまり調理をし ないので失敗してし まったが、自分なり にがんばった。		予算の作成で、資本 をどう分けるか悩ん だ。はじめに計算し たのと間違ったり失 敗もしたけれど、良 かったと思う。	

7 各学級の商品と収益

	3年1組	3年2組	3年3組	3年4組
商品名	スイートポテト ポテトチップス	いもち もんじろう いもっきー	イモクレーブ 大学イモ イモ団子	いもだんご ごまだんご いもチップス
収益金(収入-支出)	2, 138円	5, 139円	8, 314円	3, 029円
学級費繰入(1/2)	1, 069円	2, 570円	4, 157円	1, 515円
赤い羽根募金(1/2)	1, 069円	2, 570円	4, 157円	1, 515円
(合計)	9, 309円			

III 考察－文化的実践への模索

1 実践の比較検証

(1) 学習の文脈の意義と限界

学習の文脈では、単元の再構成を行っている。それを、人間の言語の習得を例に考えてみよう。赤ちゃんが言葉を覚えるとき、知識としての文法を覚えて、話しをするわけではない。しかし、単語はそのまま覚えて使う。では文法をどうして理解するかというと、赤ちゃんは親など周りの人の話を聞いて模倣する中で、自分の中で無意識に言葉の共通性による文法の再構成を行う。

成長するにつれてその精度は高まり、普通に話しをするようになる。日本の以前の英語学習では、文法という知識を元にした教育を行っていたが、オランダでは、高等教育になるまで文法を教えず、授業では英語のみ、教材は一般の本や雑誌をもちいて成果を出しているという。

これらから学ぶことは、知識は頭の中に詰め込まれているものではなく、個別の具体的な事態に即した実践の経験のなかで獲得し、個体の中で再構成されるものではないかということである。佐伯は「学習によって得られる知識は、あたらし価値の発見、吟味、創造の協同的な

『しごと』をやる—すなわち実践する—ことの中かにあり、『状況に埋め込まれて』いるものである²⁾』という。そこで学習を行う場合、その文化の担い手に近いかたちで、単元の再構成して学習者に与えることに大きな意味がある。単元の本質的な内容は、その状況の中の思考を通して学習者の中で再構成・獲得し、単元の知識は、その題材としてもちいられて学習していく。

このような学習の文脈で「附中教育審議会」というのがある。公民的分野（現代の社会生活）の単元で再構成を行っている。附中教育審議会の委員として審議（ディベート）を行うための課題の調査と、個人の立場としての新聞づくりと、学習者の中で2回の知識の再構成が行われている。しかし当たり前ではあるが、附中教育審議会は本当には存在しない。学習という名のもとで、自己実現に関係づけられて意識的に取り組む状況に追い込まれている。いわば「さあ勉強！」なのである。それゆえ、これまでの知識の注入より、自分中での知識の再構成による生きた知識になってはいるが、それはまだ与えられた学習の場であり、教師の期待象に答えるための生徒の活動になっている。

(2) 子どもが作りだした文化的実践「収穫祭」

附中教育審議会と収穫祭の最大の相違点は、仮想の状況と現実の実践との違いである。では現実の実践だったらいいのかということ、それは表面上の問題なので、収穫祭からその意味を考えてみよう。

多くの生徒が収穫祭に積極的に参加したのは、その背景に「琉球大学祭」のバザーでの大学生の振る舞いに対するあこがれがある。しかしあこがれだけでは具体的な動きにはならない。あこがれを具体的なものにしていくためには、自分の立場と具体的にさしせまった緊迫感があれば、自ずから走り出すであろう。反対に言えば、この収穫祭では特定の状況が設定され、自分たちが実現したかったことを自分たちの手で実現していく取り組みになっていた。また、収穫祭は、商品を作って売るといった活動である。売る

ためにはおいしいものでなければ売れないし、妥当な値段でなければ売れない。やりたい活動ではあるが、独りよがりでは売れないのである。いわば社会に開かれ社会から吟味されているのである。だからその中で与えられた立場をどう努めていくかという営みが、文化的実践になり得ていたと考えている。そして、そこで子どもたちが獲得したものは何であろうか。これを、次に事例とイメージで説明する。

(3) 収穫祭のエピソード記録

事例1—3年3組のイモクレープと—

いう売れ筋の商品が値上げされた
「なかなかの売れ行きで、特にクレープは列を作るほど。途中から80円→100円→150円に値上がりしていきました。とてもびっくりだけど、おいしそうに食べる人たち見ているとホット安心しました。」「需要量が供給量を上回るほどよい売り上げだったので、途中から総務部長の指示で、利潤を考えて150円に値上げした。」「最初クレープの値段は80円だったのに、途中で150円になって、それを知ったおばさまの一人がぐちゃっていたのが印象的だった。」「総務部の人たちが勝手にどんどん値上げして客から文句がきていた。利潤ばかりを考えず、客の意見を聞くことも必要と思った。」「全部売れたし利潤も大きかった。でもある人が最初80円だったのを100円・150円と値上げしていったのは、少し悪徳かなと思った。」「あそこまで売れるとは思わなかった。人が人を呼び、衝動的ともいえるお客さんがどんどん増えていくのにはびっくりした。何か行事の時など、周りに刺激されよく考えないで物を買う衝動買いはやめようと思ったひとときだった。逆に何かを売るときは、あのような状態にすれば売れることも知った。」

事例2—商品の開発—

「収穫祭前日に夜8:00ぐらいまで残って商品の準備をした。はじめは、だんごの味

が最悪だったとき『どうしよう・・・』ととても不安だった。けれど、いろいろ試してみても最後には商品として売り出せるぐらいおいしくつくることができた。」「最初のイモの味付けがとてもマズくて、とても売れないような味だった。いもっちⅡの場合、揚げたらゴマが取れてしまうなどの問題点が続出だった。しかし、商品改良を重ね良い商品ができ、すぐに売り切れた。」

「前日、クレープを50枚つくる予定が18枚しかできていなくてとても焦り、各家庭で作ることが宿題になった。1時ぐらいまでかかってようやく7枚作った。とても疲れたが、ノルマの10枚に達しなかった。翌日ちょっと落ち込んでいたが、Aさんが45枚作っていたのでうれしい気持ちと『何でこんなにつくれるの』という気持ちが入り交じって複雑な気持ちだった。」

事例3 - 会社の組織・共同体・仕事

「販売を、販売課以外の人が勝手にやってしまったため、前売り券の分の商品が足りなくなって大騒ぎになった。これは、私たち営業課、販売課の連絡が不十分であったことや、そして営業部と他の部どうしの確認がなされていなかったことから起こった。その後製造部との話し合いにより、後日商品を渡した。やはり各部ごとに独立しているのではなく、同じ会社にいるのだから、協力することが大切だとしみじみ感じた。」「はじめはただの興味だけから面白そうと単純に考えていた。だけど実際に企業活動を行ってみると、とても難しく感じた。部での案が他の部でボツになったり、経費が足りないなど、いろんなハプニングがあった。あと4つの企業をつくっただけなのに、附中という社会が衝撃にみまわれた事から企業活動の重大さを知った。」

「私ははじめ何をしてよいのか全くといってよほど分からなかったが、時間が進むにつれて会社のすごさなどを知ることがで

きた。そして会社の中の一人一人にもきちんと仕事があり、その中の一人がその仕事をしなかったら、その会社に穴があいてしまうのではと感じた。私たちは、いつでも集団の中で生きているのだと感じさせられた。」「会社を作り発展させていくというのは、ゲームのようなものと思った。その場その場の判断力や実行力が分かるのもいいところだと思う。本当に会社を作ってみたくなった。」「4組は成功だったけれど、『失敗したら・売れ残ったら』というのは事業をするうえでついてまわるものだと感じました。」

事例4 - 製造2課が商品の生産をやらなかった

※このクラスは、部・課編成の時に最初全員男子と女子に別れた。それで再編成をさせたが2度目の編成では、おおむね男女混成の部・課が編成されたが、この製造2課のみ男子のみの編成となった。これはこの男子のグループが、特に何をするというわけでもないが他との関わりを余り持とうとしない生徒のグループで、自分たちから交わる努力はしようとは思っておらず、また女子も入りきれずにこのような編成になった。

「男子があまりまとまりがなかった。計画は立てたけれど自分たちではできなかった。1組は黒字でよかった思う」「政党みたいな仕組みだと思った。一人でも違う目的の人がいたら、その人は何もやることがないです。つまり努力しないということなので、将来の自分のため今のうちにきちんとしていた方がいいと思います」「クラスの協調性のなさが目に見えて分かった。少しさみしい。協同的な仕事について、目標は達成というより分かってきた気がする。」「製造2課の人と相談をしなかったのがまずかった。企業としてのまとまりが無かったように感じている。」「製造部を1課・

2課はなくして、1つにすれば良かったと思う。」

(4) 文化的実践のイメージ

この事例を整理して文化的実践をイメージで捉えてみる。学習者が、自分の存在から派生して共同体の構成員の一員として社会に開かれた活動を行う。つまり、臨時教育審議会など学習課題に対する取り組みも実践活動であるが、収穫祭が文化的実践として特徴づけられる点は、2つにまとめられると考える。一つは生徒の営みが自分の存在（アイデンティティ）から派生しているかという点、もう一つはその営みが社会に開かれ社会の吟味にさらされているかという点である。

文化的実践の中では、文化の価値を学習者の中で再構成し、同時に学習者に共同体の一員としての意識も生まれる。それは、1学習者だけにおこっていることではなく、その共同体の構成員全員にその個性に応じていろんなかたちでおこり、それがお互いに交渉を持ちあう。この交渉の場が「学びの共同体」だといえるだろう。そこでは、文化の価値の再構成が1学習者と文化との関係だけでおこるのではなく、共同体の構成員の相互交渉の中で、それぞれの学習者の中に個々に文化の再構成が行われるのである。

(5) 文化的実践を単元の目標のあり方から捉え直す

附中臨時教育審議会では、これまでの観点別の目標をたてていた。収穫祭でも、もちろん観点別の目標を立てたが、それだけではそれぞれの目標を達成することに重点がおかれると考えた。それはそれで重要なことであるが、文化的実践として全体としてトータルに捉えることが必要である。なぜならば文化的実践は、それ自身に意味があるのであり、結果として観点別の目標を達成しているのである。文化的実践は、学ぶために文化的実践を行うのではなく、自分に取って意味のある活動を行う中で結果として学ぶのである。それは、藤田が指摘する『『生活が陶冶する』というペスタロッチの教育論に

見られるように、教育は将来の生活の準備であるよりも、まず生活そのものでなければならないという、児童中心主義・生活中心主義的な教育観として見られた考え方でもある。』³⁾」といえる。そこで、これまでの観点別の目標と別に、文化的実践の目標を設定した。

〈収穫祭の文化的実践の目標〉

会社を設立して、試行錯誤を行っていく中で、新しい価値の発見・吟味・創造の協同的な「しごと」を行い、結果として企業活動についての認識を深める。

事例5－目標について

目標は達成しようと思わなくても、勝手に達成していたと思う。この授業では、あまり目標を立てなくても、各自で何かを発見すると思う。

2 文化的実践としての収穫祭の課題と教師の指導性

(1) 教師の視点が文化的実践になりきっていないところでは、状況設定がされていない

事例6－社長・副社長の仕事

「僕は副社長だったけれど、販売の仕事を手伝いたくさんのイモ料理をさばいたので、自分ではいい方だと思う。」「各組織で、ちゃんとまとめる人はいたのでしょうか。今思うに、各課で書いたのを提出して総務の人たちと話し合ってみたかった。」「いきなり社長になってすこし混乱した。あと、社長は社員よりやる事があまりなかったような気がした。難しいことを知った。」「副社長はとても楽な社員ではないかと思いました。しかし僕はひまを作らず収穫祭では、営業の仕事をした。」

社長になった生徒は、社長が何をよいかかわからない。意識のある生徒は、かえって具体的な仕事の手伝いをして、自分の責任を満たそうとしている。社長は各課のように具体的な実践の目的が与えられているわけではない。与

えられているとすれば、会社の目的を達成することであろう。これを教師の指導性で考えてみると、教師は各課の実践については目的意識と方法論を持ちえていたり、生徒とともに獲得していった。しかし、反対に社長の実践については目的意識は理解していても、方法論として具体的にイメージするまでの準備ができていない。教師自身が社長の立場に戸惑っている。だから、当然社長になった生徒も戸惑っているのである。

これから学ぶ点は、教師自身がその文化的実践の先駆者でなければ、生徒に文化的実践を期待することはできない。それは教師自身が、常に自分の存在から派生して共同体の構成員の一員として社会に開かれた活動を行っている存在でなければ、文化的実践の創造者にはなりえないともいえるであろう。

(2) 関係の中で捉える知識の獲得

また、事例6は私たちに次の点も示唆させている。教師自身が社長の立場に戸惑っているのは、そういう資質（関係の中での）の知識を教師自身が、これまで受けた教育の中で獲得してこなかったからではないだろうか。だからこそ、教師自身が、常に自分の存在から派生して共同体の構成員の一員として社会に開かれた活動を行っている存在に、なかなか成りきれないともいえるであろう。

そこで事例6を整理すると、下部組織の中ではやる事がわかりやすくまとまりもよかったが、管理職がやるべき自分の部内の課どおしの調整や他の部との調整が、管理職になった生徒には前人未達の仕事のように写っていた。これまでの社会科の取り組みでは、管理能力の養成はほとんど行われてこなかったという実感を持った。といってもここで言いたいのは、この管理能力は一側面で、関係の中で捉える力のことである。関係の中で捉える力には、一つには創造力があり、もう一つには他の人々の価値と自分の価値と共同体の価値の調整があると考えられる。

ここでは特に他の人々の価値と自分の価値と共同体の価値の調整と文化的実践について考え

てみよう。この調整は、言い換えると関係論的な見直しができるかともいえるであろう。そして関係論的な見直しは、これまでの知識の集積や体系化の中ではなく、関係論的な見直しの経験の中でしか獲得できない。もちろんこれまでも思考・判断の環境を作ってきたではないかといえるであろうが、解決がわからない開かれた課題でなければ思考・判断の方程式であり、文化的実践はまさにこの開かれた課題といえるだろう。この課題の解決には、思考判断といっても論理性だけでなく、自己と他者・共同体のアイデンティティに立脚した価値の調整である。そういう意味での文化的実践を行うための単元の再構成を今後検討する必要があるだろう。

(3) 自分の立場に主体性を持たせるために

事例7 収穫祭の流れを追った生徒の感想（製造部の生徒）

①千原村収穫祭説明会・会社経営セミナーについて「説明を聞いたとき、『何かめんどくさいな』という気持ちが少しありました。でもよく考えてみると、文化祭っぽくて楽しかなくて気持ちもあった。」

②組織や人事について「いろいろな部・課に別れるとき、どの部が何の仕事をするのか全然わからないうちに決まって、はじめ自分がこの部で仕事をやっていけるのか不安だった。」

③部や課での話し合いについて「はじめの話し合いは遊び半分だったけど、次回からはちゃんとした話し合いができた。」

④収穫祭の準備について「計画がうまく立てられないで、収穫祭前日になって慌ててイモを調理した。そして当日に調理する予定のものも準備不足で最後まで商品をつくっていた。」

⑤収穫祭について「みんなそれまでは結構のんびりしていて、収穫祭の前日や当日に慌てている人が多かった。でも、前日や当日になると、各クラスの男子と女子の協力がすごく良かったと思う。楽しかったし利潤もあがったので良かった。」

⑥収穫祭を終えて―「はじめてこういうことをやってみて感じたことは、みんなが協力しなかったら絶対に収穫祭はうまく行かなかったと思う。今回の企業活動は、クラスみんなにとって良い経験になったと思う。」

社長については先ほど述べたが、社長以外についても上の感想からわかるように、全般的に生徒が立场上の意識を持ち始めるのが遅かった。彼らは社会の授業の中で、会社の社員という立場が突然与えられたのである。それですぐ自覚を持ち動き始められるほうがおかしいし、考えればこれは当然の結果である。でも遅かったが、実践を目前に迫られて否応なしに立場を自覚しはじめ、具体的方法を模索して実践を行っていった。だからこのような、立場を突然与え実践を迫るという方法は、文化的実践の方略として有効ではあるといえるといえる。しかしその状況に引き込むのであるから、最初の導入の段階、ここでは「千原村収穫祭説明会」の提示の仕方でのインパクトが重要になってくるだろう。

しかし、この状況を整理し再構成すると、自分たちの意識の結果として自分たちで立場を作っていれば、より自覚的になり、意識的な方法論の模索が始まるであろう。例えば、まず収穫祭でバザーをやろうという雰囲気をつくる。そして教師が村長になり「千原村収穫祭説明会」を行うが、「会社経営セミナー」を開いて自分たちで学級ごとに会社を設立させる。このとき、発起人を学級で選び、彼らに会社設立の原案を作ってもらい、(株主総会)学級会で審議し、人事を行う。組織が「会社経営セミナー」で提示したものと同じになって、結果として与えられた状況と同じになっても、自覚的な行動の中でおこっていることなので、意識的な方法論の模索が始まるであろう。このようなやり方で言えば、これは自然な会社設立の状況と同じことで、それは会社設立の文化の中に支援が組み込まれているといえる。

(4) 文化的実践での目標の質と教師の指導性

さて、立場を作るにしろ与えるにしろ、その文化的実践をどの程度の質の目標を設定するかにより、どの程度の実践が行われ、その中からどの程度の学びが生まれてくるかが決定する。そういう意味で、教師の指導性は目標の質をどのように設定するかが重要である。もちろん、不十分な文化的実践だからこそ、その問題性を感じて学びが生まれてくることもある。しかし、具体的でより高い内容のある事例であれば、個々のなかに自然に達成感に基づいた価値の再構成が行われるであろう。そしてそれは、構成員のより多くのなかでおこるであろうし、当然獲得した知識は肯定的で意欲的なものとして活性化するのである。それに対して、実際にその方向に行った実践経験を持たない場合には、その具体的な事象の中から獲得する知識と違い、あこがれにすぎず充足感が伴った知識には成りづらいであろう。このように、文化的実践では生徒の学びが繰り広げられており、その学びがどれだけ織り込めるか、多くの価値のある学びを織り込める質の目標を教師が立て、その実現に指導性を発揮したいものである。

(5) 効果的な学びの共有を求めて

前出のように、生きた知識は個別の具体的な事態に即した実践の経験の中で獲得する。今回の文化的実践のなかでは、<①事例1-3年3組のイモクレープという売れ筋の商品が値上げされた>のような具体的な事実が生まれてきている。そしてこの事実はそこにいた人々で共有され、事例のようにさまざまな感想を持つ。これこそ、個別の具体的な事態に即した実践の経験の中の生きた教材である。これを教師が実践終了後データを整理し、この出来事を構成員全体の中で共有化し、個々の意見をオープンにすることにより、生きた学びの場が創造できるのではないか。今回はここまでの見通しを持っていなかったため、この学びの場を設定できず、生徒個々に経験の中で学んだもので終わってしまっている。しかし、学びの共有化が文化的実践の大きな意義であろう。つまり文化的実践に参加しているということは、その出来事の場に

同席したり、その出来事自身には関わっていないが同じ背景の中にいることにより、具体的事象としてその出来事を捉えられる。それは、文化的実践により生きた教材が生まれたともいえる。そして、その出来事を教材として、共同体で共有化し議論をしていく中で、その出来事の内容分析が十分行われ、多くの級友の意見を参考にしながら個々の中に高いレベルでの価値の再構成が行われるであろう。

IV まとめと課題

1 文化と教育

人類学者のレイブは、様々な分野の生産に関わる実践活動について行われてきた詳細な分析を要約して、次の2点を主張している。⁴⁾

(1) 実践活動に参加するということは、そこで要求される問題を解くことであると同時に、その実践をより効果的に行うことができるように学習することでもある。つまり、学習は人間の活動に内在するものといつてよいが、それが主たる目標ないしそれだけが独立に存在するというわけではなく、社会的に意味のある活動の遂行(つまり実践活動)と一体になっているのである。

(2) 社会的に手はずの整えられた実践においては、そこにさまざまな物理的・社会的な支援が組み込まれており、それによって人々が最初からスムーズに参加できる可能性が大きい。

私たちのこれまでの教育の取り組みは、これに相反する方法論を取っていたのではないだろうか。社会と切り放して効果的な教育をめざして、結果として空回りしているようなものである。教育は文化の継承・発展であると、基本的に立ち返ってみると、教育の方法論自身も文化にゆだねていくことによって、生きてくるのではないだろうか。

文化について私は最近次のように考えるようになった。それを、ラジオで聞いた話をもとに説明する。冒険家のジャック・ニコルソンがパーティで南極の雪原で厳しいキャンプ生活を送っ

たとき、その中で耐え抜いた人間像について語っている。それは、周りにとらわれないタフな男像を予想するが、実際はそういうタイプはだんだん余裕が無くなっていった。耐え抜いたのは、厳しい雪原の中で多くの人がやらない、朝起きると顔を洗い、あいさつを交わし、いただきますをいい、ジョークを飛ばすようなタイプであったという。

これを私は次のように捉えている。いわゆる周りにとらわれないタフなタイプは、本当に自分の持っている生きる力で生き残ろうとする。その生きる力は、自分の精神力に支えられているのであるが、精神力にはもともと限界があるのが当然である。しかし、もう一つのタイプは、結果的には精神力に依存しないで、文化に依存しているのである。朝起きると顔を洗い、あいさつを交わし、いただきますをいい、ジョークを飛ばすという文化の中に内在している豊かさによって、自分を支えているのである。

つまり、生きる力を個人の中に求めようとすることに限界があるのである。文化の中に生きる力のもとが内在しているといえる。だから文化を抽象化して知識として伝達してもそれを伝えることはできない。文化が活性化している状態そのものを受け伝えなければ、生きる力を身につけることはできないだろう。だから、教育は意味のある活動である文化そのものである必要があると考える。

そういう意味でこれからの教育が、教育本来の文化そのものを伝え発展させる立場に立ち返ることが重要になってくると考えている。そしてそれは、先ほどから述べてきた文化が活性化している状態、例えば文化的実践として捉えられているものである。

2 これからの課題

(1) 文化的実践の学びをアイデンティティの中での関係論的見直しと捉える

文化的実践は、文化を捉える視点での単元の再構成と、単元ごとにテーマを持った学習が一つの入り口である。それは単元の再構成をする

中で、学習の文脈を取り込んでいき、その文脈が時としてアイデンティティを刺激する。そこに文化的実践が生まれる。その文化的実践の中で、学習者は新しい価値の発見、吟味、創造の協同的な仕事を行う。そしてそこに、アイデンティティにもとづいた関係論的見直しが行われるであろう。

(2) 学校行事等を教科の中に取り込み、教科の学びの真性を高める

教科の学びの真性を高めるためには、社会に開かれ、社会に吟味されなければならない。そういう意味では、実践活動は常に社会から吟味されている。学校の中での実践活動の多くは学校行事や特別活動である。これをこの収穫祭のように教科の学習に生かさなない手はない。しかし、今後このような実践活動は、総合学習に組み込まれていくであろう。だからこそ、その総合学習の中で、社会科の学びの真性を生かしていくことが課題である。

事例8-収穫祭の評価

私は、はじめ何をしたら良いのか全くと言ってよいほど分からなかったが、時間が進むに連れて、会社のすごさなどを知ることができた。そして会社の中の一人一人にも、きちんと仕事があり、その中の一人がその仕事をしなかったら、その会社に穴があいてしまうのではと感じた。私たちは、いつでも1つの集団(共同体)の中で生きているのだと感じさせられた。

(3) 関わりに価値を見だし豊かに生きる

「収穫祭」を通して多くの生徒が、共同体を意識している。そして、クラスのまとまりについて言及している生徒もいる。生きる力の最大の構成要素は、生きる楽しみや意欲ではないかと考えている。それは、人間や環境に対する関

わりに価値を見いだすことによって生まれてくるであろう。そしてそれが、教育の中心的な課題ではなかろうか。その課題の達成には、文化的実践が大きな役割を果たすであろう。そして、今後の一つのキーワードとして社会学で注目されている「意味ある他者」という捉え方も視野に入れていきたい。

V おわりに

本研究は、「収穫祭」という文化的実践を、文化をキーワードに、学習の文脈を文化的実践に高めるためにはどういう視点が重要なかを考察した。まだまだ未熟ではあるが、この小論に対し、忌憚のないご意見をいただければ幸いである。

最後に、このレポートを書くという文化的実践に私を追い込んでいただいた、琉球大学教育学部助教授の里井洋一先生に感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 佐伯胖「文化的実践への参加としての学習」(佐伯胖, 佐藤学, 藤田英典編『シリーズ学びと文化① 学びへの誘い』東京大学出版会, 1995年, p.30)
- 2) 佐伯胖「文化的実践への参加としての学習」(佐伯胖, 佐藤学, 藤田英典編『シリーズ学びと文化① 学びへの誘い』東京大学出版会, 1995年, p.32)
- 3) 藤田英典「学習の文化的・社会的文脈」(佐伯胖, 佐藤学, 藤田英典編『シリーズ学びと文化① 学びへの誘い』東京大学出版会, 1995年, p.124)
- 4) 波多野誼余夫「文化心理学入門」(岩波書店, 1997, p.44)